

小林 快次さん

恐竜研究者
北海道大学教授

巻頭インタビュー p.2



知っておきたい教育 NOW p.4

- ① これからの修学旅行を考える
- ② 令和の北海道修学旅行

きょういく見聞録 p.8

- ① 『～令和の記憶・記録プロジェクト～
「未来に残したい福生の風景写真コンテスト」』
－全てはふっさっ子の未来のために－
- ② 甲州市「夢をかなえる学び」のプロジェクトの推進

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

【連載第1回】

子どもの心理とコロナ禍

～コロナ禍とその後に起こったこと・起こっていること～

Front Runner p.15

【連載第2回】

郷土資料館が、市民の「居場所」に
ベーゴマが結ぶ人の輪

ほっとな出会い p.16

アート教育実践家・
アーティスト

末永 幸歩さん

大きな夢を仰ぐよりも、 人間として目の前の一步を

恐竜研究者 北海道大学教授 | 小林 快次^{よし つぐ}さん

「勉強をするな」の真意とは？

——どうしたら恐竜博士になれますか？ 子どもたちやその親御さんからよくこんな質問をいただくのですが、必ず言う言葉が二つあります。一つめが「勉強をするな」です。「なんて無責任な！」と思われるかもしれませんが、「勉強」というキーワードが出た瞬間から、本来はおもしろいはずの「学び」が苦行に変わってしまうからです。

現在の日本においての「勉強」は決まった正解に照準を合わせテストに回答するための訓練であって、「学び」とは興味をもったことを探求すること、つまり僕たちがやっている研究と同じくとても楽しいことなんです。私が籍を置く北海道大学の研究室に入ってくる優秀な学生たちは、それこそ勉強はできるけれど学ぶこと＝研究が苦手です。「どんなことを研究したい？」と尋ねると、なまじっか頭がいいものだから過去の論文などを引っぱりだしてきて「恐竜の中足骨の形状から走行性の進化を……」とか何とか言うわけです。本当にそんなことが知りたいのかといえはそうではなく、教授、つまり僕が気に入っているような答えをあてにきているんですよ。そのような小手先で他の論文の隅をつつくような研究はすぐに行き詰まってしまう。

以前、恐竜博士として子どもたちの

質問に答えるという

企画を受けたことがあるのですが、就学前の恐竜大好き子どもたちは実にユニークな質問を投げかけてきます。「恐竜はいびきをかくの？」「虫歯になるの？」と。しかし小学校に上がったとたん、僕が監修した図鑑などを読み込みそれにそつ

た大人好みの質問をするようになるんです。研究テーマとして創造的で発展的なのは、明らかに前者です。研究室の学生たちには「一言で語れるテーマを考えてみて」とアドバイスし「恐竜のことを知りたい」とワクワクしていた子ども頃の気持ちをまず思い出し出してもらおうにしています。

夢はもたなくていい

もう一つが「夢をもつな」です。もともと夢があるならそれでいいとは思いますが、わざわざ「夢をもて」「夢中になれることを見つけてなさい」などと言うことは意味がないし、これほど残酷な言葉はないと思うんですよ。「夢をもて」と言っている本人が子どもの頃の夢を叶えていないことがほとんどだったりして「無責任な発言だなあ」とすら感じ



PROFILE

1971年福井県生まれ。北海道大学総合博物館教授。大阪大学総合学術博物館招聘教授、米国テキサス州・ペロー自然科学博物館招聘研究員。ワイオミング大学地質学地球物理学科を首席で卒業後、サザンメソジスト大学大学院にて日本人で初めて恐竜の博士号を取得。2011年から北海道勇払郡むかわ町でむかわ竜（2019年にカムイサウルス・ジャポニスクと命名）の発掘を指揮。日本国内初となる巨大恐竜の全体骨格の発掘は話題を呼んだ。「恐竜まみれ 発掘現場は今日も命がけ」（新潮社）『化石ハンター』（PHP研究所）他、著書多数。

ます。じゃあどうしたらいいかといえは、子ども自身が気になったことを、なんでもいいからやってみるしかないんですよ。そのうちの何かに興味が移り、夢や目標のようなものになることがあるだけで、最初からいきなり夢などなくてもいいですよ。僕自身も子どもの頃は恐竜に興味などなく、勉強も嫌いで「15分間、机に向かっている姿を見たことがない」と両親があきれられるほどでした。

科学の楽しさを教えてくれた恩師

しかしながら、今に至る萌芽は中学時代にあつたように思います。アンモナイトなどの化石発掘に夢中になったんです。僕の担任で地学を教えていた吉澤康暢^{やすのぶ}先生に理科クラブに誘われ、小中学生向けの化石発掘ツアーに参加したことがきっかけでした。吉澤先生は少々型

破りというか、今の教育現場では絶対に許されないでしょうけど、牛の心臓を解剖し、そのあとクラスのみんなで焼き肉にして食べるという授業をしたり、校長に就任されてからも、朝礼で「これが今日の挨拶だ！」と壇上で唐突に実験を始めたりするような人でした。けれども、先生自身がサイエンスを心から楽しいと思っていて、その熱が伝わってくるんです。好奇心の塊で、大砲みたいなものすごい望遠鏡で天体観測をしていましたし、冬山にも挑む登山愛好家で、フォトグラファーでもありました。学校を退職されてからは福井市自然史博物館の館長をされていて、その関係で講演などの仕事を一緒にさせていただきました。昨年の1月に鬼籍に入りましたが、僕にとって永遠の師です。

人生を変えた映画

「いまを生きる」から学んだこと

さて、化石バカのような中学生だった僕も、高校生になる頃には「化石から卒業しなくては」と考えるようになっていました。化石収集では生活できないことがわかっていたからです。周囲の誰もが現実的な将来を見据える中で歩調を合わせるように「いつか安定した企業に就職するのだろう」とぼんやりと思い描いていました。横浜国立大学在学中にアメリカに留学したのも「英語が話せば就職に有利かも」という軽い気持ちでした。しかし、勉強は嫌いだし、英語も得意ではないから毎日がつまらなく、一日一日を無為に過ごしていました。そんな日々の中、漠然と「死」の存在を意識するようになったんです。その時、1999年に世界が滅亡するというノストラダムスの大予言が流行っていて、「1999年って28歳か。もしあと10年そこそこで人生が終わったら後悔しないだろうか？」と。「自分が心からやりたいことは？ 夢は？」自問自答するもなにひとつ出でてこない。目標や夢がある人が眩しく見え、空虚な自分が情けなくてたまりませんでした。当時の僕はプライドばかり高く、人と自分を比べて失敗を恐れ、いつもうっすらと不満をためていたように思います。今してみると大した悩みではないのですが、自分にとっては長く苦しい時間でした。

霧が晴れる瞬間は突然訪れました。帰国後に『いまを生きる（1989年アメリカ）』という映画を鑑賞し、いたく感銘を受けたのです。全寮制の名門校に破天荒な教師が赴任してきて……という

ストーリーですが、その教師は生徒に、自分の考えでまず目の前の一步を踏み出すことの大切さを説き「カルペ・ディエム（今を掴む）」というラテン語を教えます。その言葉にハツとして「遠い先ではなく今を大事にしよう。興味をもったことを全力でやってみよう」と思い切れたんです。その後、たまたま図書館で開いた図鑑で恐竜に関きのようなものを感

じ、大学を中退し再び米国へ渡りました。実家は決して裕福ではなかったのですが、両親は家を建てるために用意していた土地を売って費用を捻出してくれました。「あの時は何をしているのかと思つたよ。モノになったからいいけれど」と今も親戚一同に笑われます。

2度めの留学を決めた時、僕自身は「モノになる」とは考えていませんでした。恐竜の研究で博士号をとった日本人はまだいませんでしたので、恐竜研究が仕事になるという発想がありませんでした。成果を最初に設定していたらあんな行動はとれなかったかもしれない。

真の自立とは、

自ら選択し納得すること

夢を描くことは、いきなりエベレス

トの頂を目ざすようなものではないでしょうか？ そうではなく、やりたいと思うことを一つずつ積み重ねていけば、気づけば誰もが自分だけの山を登っているものです。その山は他人と比べるものではなく、自分の足で納得しながら登った山の頂から見える景色は、きつと格別に素晴らしいはず。親御さんや先生がたが、子どもが経済的に困窮しないように、よい仕事を得ることができるようにと「勉強しなさい」「目標をもって取り組みなさい」と言いたくなる気持ちも理解できますが、誰かにやれと言われてやったことに真の納得も満足もありはしません。大人の使命とは子どもを独り立ちさせることです。自立とは、お金を稼いで生活ができるようになることではなく、一人の人間として自分の考えで一步を踏み出し、その選択に納得することだと僕は思うのです。

教育現場で日々子どもたちに向き合っている先生がたのご苦労を思うと、おいそれと偉そうなことは言えませんが、学びの楽しさを伝えるという点では、僕も先生がたも立場は同じではないでしょうか？ 僕もサイエンスに携わる者として、子どもの自立を願う大人の一



人として、科学の楽しさ、学ぶことの楽しさを伝えていきたいですね。



これからの修学旅行を 考える



公益財団法人全国修学旅行研究協会
理事長 (元全日本中学校長会会長)

岩瀬 正司

100人が死亡する大惨事を始めとして、悲惨な事故が続発した。その後、日本経済の高度成長とともに、修学旅行の教育性・安全性・経済性を求めた教育界の要望はやがて修学旅行専用列車・船舶として結実していき、現在に至っている。

日本人の共通体験、旅の原点

130年以上の歴史がある修学旅行は、諸外国にも例をみない日本独特の教育活動である。ほぼ全ての日本人が学校生活⇨青春期の思い出として共通体験しており、学校文化でもあり、日本人の旅の原点の一つでもある。

コロナ禍で多くの学校で修学旅行が中止・延期を余儀なくされる中であって、修学旅行の実施を求めた保護者の動きもあった。それは、自分が体験したあの貴重なひとときを子どもたちにも、という切実な声である。

「学びの集大成」としての修学旅行

学習指導要領「特別活動 学校行事」で位置づけられている修学旅行は、教育課程の一環として実施され

ポイント

- ① 明治時代から始まる修学旅行は、日本全国の学校で実施され、ほぼ全ての日本人が体験している。
- ② 学習指導要領で規定され、教育課程⇨授業の一環として実施される修学旅行は、「学びの集大成」でもある。
- ③ コロナ禍を経て、諸物価の高騰や各方面の人手不足により、修学旅行は大きな課題に直面している。

修学旅行の始まり

1886(明治19)年に東京師範学校(後の東京高等師範学校、東京教育大学、筑波大学の前身)が実施した「長途遠足」が修学旅行の始まりとされている。生徒たちの見聞を広めるといふ目的は現在に通じるものがあるが、大きく異なるのは兵式体操と呼ばれた軍事教練の一環として実施されたこと。参加生徒約100名は軍装して東京お茶の水から千葉県銚子への10泊11日の、主として徒歩移動の往復旅行であった。寝食をともにしての野外体験学習の教育的効果は大きく、当時の文部省の働きかけもあって「修学旅行」の名称とともに全国に普及していった。

当時の国策であった「富国強兵」にそった修学旅行は時代の流れとともにあり、やがて、日清・日露戦争の戦跡巡りや、軍部の協力で戦艦に便乗する学校も出てくる。しかし、時代が戦時体制下になると実施は当然不可能となってくる。

敗戦後の混乱を乗り越えて

1945(昭和20)年の第2次世界大戦の敗戦以降、日本は未曾有の混乱期を迎えるが、1952(昭和27)年の講和条約発効の頃から、食料や輸送・受け入れ状況の不十分なかでの、復活・復興が始まっていく。しかし、1955(昭和30)年に宇高連絡船紫雲丸が沈没し、児童生徒



● 毎年5月の最初の専用列車出発日に、東京駅ホーム上で実施される修学旅行出発式

る授業である。通常の観光旅行や家族旅行とは一線を画し、単なる物見遊山や親睦・行楽旅行ではない。従って、修学旅行での「学び」をどのように具現化していくかが重要となる。

特別活動は「なすこと」によって学ぶ」のが方法原理であり、各教科等の学びの基盤ともなるものである。また、育成を旨とす資質・能力の視点として「人間関係育成」「社会参画」「自己実現」が挙げられている。これらを勘案すれば、修学旅行こそまさに「学びの集大成」として最も適切な実践の場にふさわしいものとなる。

「学び」の構造化

「生きる力を育む」ことを求めている現行学習指導要領では、「学び」が構造化されている。つまり、「何を」学ぶのか、「どのように」学ぶのか、その結果「何ができるように」なったか」と。この視点を修学旅行にあてはめれば次のようになる。

- 何を学ぶのか—各教科・道徳・総合の既習事項の確認・整理・習得・実践・知の総合化、修学旅行の目標達成
- どのように—見学、講話、体験、観察、対話等の方法で、主体的・対話的で深い学びの実践(※)
- 何ができるように—なったか—各学校の教育目標、求めている生徒像、保護者の願いの具現化

(※)「主体的・対話的で深い学び」を筆者なりに簡略化すると

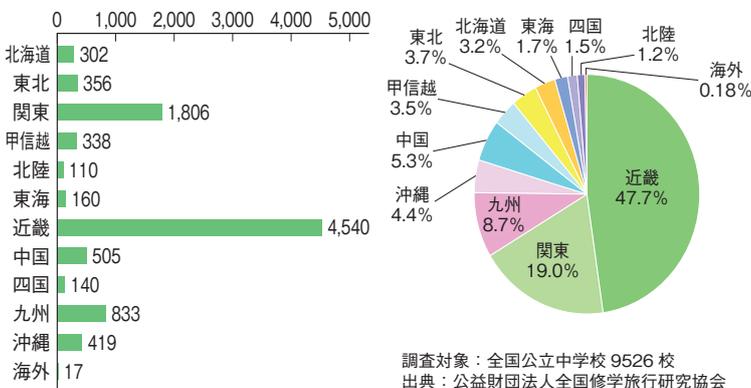
- 主体的—自分自身
- 対話的—自己、師友、現地や旅行関連者、過去と対話し
- 深い学び—課題設定・探求・解決して、発展的な学びにつなげる

また、「教科横断的」「個別最適」「協働的」な学び、あるいは、「探究」「キャリア」「SDGs」学習などの場としても最適である。

コロナ禍を経て

コロナ禍後、修学旅行は新たな大きな課題と直面することとなった。あたりまえの修学旅行があたりまえに実施できなくなってきたのである。

1点めは、諸物価の高騰。全ての物価が高騰したために、当初の計画通りの実施が困難となり、保護者負担が激増している。2点めは、あらゆる業界・職種の深刻な人手不足。旅行会社の入札辞退、バス・タクシーの確保困難、学校からの要望制限等々の問題が起こっている。一部の



● 2023 (令和5) 年 中学校修学旅行実施方面の棒グラフ・円グラフ

「一瞬にして永遠」の修学旅行

現職の中学校長時代、第2学期末に3年生全員と面談するのが慣例となっていた。高校入試の面接練習も兼ねていたが、普段生徒たちと接することの少ない校長にとっては、生徒の生の声を直接聞くことができる貴重な機会であり、楽しいひとときでもあった。

その面談の際に「中学校生活で印象に残るベスト3は？」と聞くと、ほとんどの生徒は修学旅行を挙げる。中学校生活3年間約1000日の中、わずか二泊三日の三日間、生涯の貴重な財産となっている。たかが三日間、されど三日間、「一瞬にして永遠」の三日間が修学旅行なのである。

令和の北海道修学旅行



東京都練馬区立開進第二中学校

校長 牧野 英一

きる。

本校は、東京都人権尊重教育推進校の指定を継続的に受けており、1年生段階から、さまざまな人権課題について学び、イングリッシュキャンプを始め、民族音楽等の異文化理解学習を推進している。今後の国際化の一層の進展等を見据え、3年間の学びの集大成として、「国際化に柔軟に対応し、多様性を受容して共生する。」ことをテーマとして、2024年から、北海道「ウポポイ(民族共生象徴空間)」を中核とした修学旅行を実施することとした。そして、二泊三日の行程の中に、人間、自然文化、歴史の実体験をストーリーとして位置づけ計画を作成した。

余韻が残る北海道修学旅行

修学旅行では、各学校の創意工夫によりさまざまなプログラムが実施されている。例えば、平和学習では、現地で実際の遺構や遺物をまのあたりにしながら、語り部のかたからお話を伺うなどの学習を実施している。この際、学校として留意しなければならぬ点は、生徒にとって、消極的・受動的・一方的な体験とならないように、実体験(実感を伴う体験)を企画することである。

そこで本校では、人間、自然、文化、歴史の内容を「積極的(Positive)」「活

ポイント

- ① 学びの集大成としての修学旅行
「国際化に柔軟に対応し、多様性を受容して共生する」
- ② 余韻が残る北海道修学旅行
「生徒一人一人がまた行つてみたいと思う実体験をする」
- ③ 修学旅行のPDCAサイクル
「P事前学習↓D実体験↓Cまとめ↓A発表および振り返り」

学びの集大成としての修学旅行

これまで、本校の修学旅行は、概ね10年間隔で行き先を変更してきた。2013年から人権教育の一環として、宮城県南三陸町で「自己や他人の命の尊さ」をテーマとして実施した修学旅行が10年めを迎えたため、10年後を見据え、全国各地の修学旅行先を自身で視察した。

その過程で、2022年、全国の公立中学校で5万7000人以上の中学生が航空機を利用する中で、(大阪府約10%、滋賀県約20%)、関東圏は、航空機の利用率が極めて低いこと(東京都は約0.6%)。航空2社の団体割引を活用することで京都・奈良並みの料金で実施できることに気付いた。

そこで、次代を担う中学生にとつてよりよい修学旅行を実施するため、目的と内容について教職員と多様な視点から検討を重ねてきた。修学旅行は、学習指導要領では、特別活動の旅行・宿泊的行事に位置づけられており、多様な他者と協働する中で、集団活動の意義を理解し、合意形成や意思決定を図りながら、自己実現を目ざすことを大きな目標としている。

改めて、修学旅行について考えてみると、少なくとも、人間、自然、文化、歴史等の多様な側面がある。生徒が今まで学んできた知識および技能を活用し、集団の中で仲間と試行錯誤しながら実生活の課題の解決を図る活動で、中学校教育において、学びの集大成として位置づけることがで

動的 (Active)」「双方向 (Two-way)」を合い言葉に、実体験を通して生徒一人一人が「また、行ってみたい。」という余韻が残るような北海道修学旅行になるように次のように計画し



1 航空機体験 (文化)



2 ウポポイ (人間)



3 秘湯体験 (自然)



4 北海道膳 (文化)



5 支笏湖遊覧 (自然)



6 札幌班行動 (人間)



7 ジンギスカン (文化)



8 開拓の村 (歴史)

た。

一日め 学校 (バス) ↓羽田 (航空機体験①) ↓新千歳 ↓ウポポイ (共生②) ↓支笏湖 (丸駒温泉 ↓秘湯③ ↓北海道膳④)

二日め 支笏湖 (遊覧船⑤) ↓札幌 (班行動⑥) ↓夕食 (ジンギスカン⑦) ↓札幌 (ホテル泊)
三日め 朝食 (海鮮バイキング) ↓北海道開拓の村 (案内・説明見学⑧) ↓新千歳 (航空機体験) ↓羽田 ↓学校 (バス)

修学旅行のPDCAサイクル

P 事前学習

生徒に「また、行ってみたい。」と余韻が残る修学旅行を実施するためには、事前学習が極めて重要になる。そこで、1年生時、夏休みに実施するイングリッシュキャンプで十か国以上の講師のかたと英語を通して交流し、異文化を理解するきっかけとする。

そして、2年時には人権課題「外国人」について道徳で学び、自他の大切さを認めるといふ人権尊重の理念を意識づける。今年度は2回目の北海道修学旅行に向けて、「アイヌの人々」について、動画を通して学び発表したうえで、(公財)アイヌ民族文化財団に来校を依頼する。アイヌにルーツのある、都内近郊に住む30

代から70代のかたがたから民族差別について体験談を直接伺いともに伝統舞踊を踊り、その後、「共生」について、双方向で考える。

3年時には、アイヌ民族文化財団を通して、5月に迫った修学旅行を前にして、「ウポポイ (民族共生象徴空間)」は、アイヌの人々にとって、どのような場所なのか、生徒からの素朴な質問を通して双方向で考える学習を行う。また、国際化に柔軟に対応するきっかけとして、空港にはCAやパイロット以外に、整備、清掃、搭乗手続き、荷物等、多様な業務にあたるスタッフが、全員のチームワークで空港の安全性やおもてなしが成り立っていることをPM動画で学び、意識づける。

それ以外にも、支笏湖の自然、札幌の班行動、北海道開拓について調べる際に、①いちばん行きたい場所と理由を明確にする。②事前調査の予想と現地での実体験を比較検証する。③理由を明確にしてテーマを設定し、事前調査で仮説を立てる。実体験を通して考察し、考え方の変容を考える等、生徒の実情や興味・関心に応じて課題を設定する。

D 実体験

事前学習を踏まえて、「積極的 (Positive)」「活動的 (Active)」「双方向 (Two-way)」を合言葉に、二泊

三日で計画した学びのストーリーの中で、仲間と試行錯誤しながら活動する。そして、事前学習で準備した①〜③について、五感を研ぎ澄まして実体験し、自分の予想や仮説と比較検証をする。

C まとめ

現在は、インターネット等で簡単に北海道の情報や映像を見ることが出来る。しかし、そうした時代だからこそ、実体験して感じたことを自分の言葉で相手に伝えることが一層求められている。その際、自分から一方的に「伝える話」から、聞き手の立場を考えて、双方向でわかりやすく「伝わる話」にすることをテーマとする。

そのため、自分が選択し事前学習で準備した①〜③のステップを踏まえて説明することを重点目標とする。

A 発表および振り返り

北海道の大自然の中で、三日間仲間と協働して活動し、空港や航空機への理解を深める。ウポポイ等における実体験を通して、多様性を受容して共生する意味について考える。そして、学びの集大成として自分の考え方に影響や変容があったのかを振り返り、後輩たちに伝える。生徒に「また、行ってみたい。」と余韻が残る修学旅行を今後も企画していく。

です。戦前戦後の写真は、80年以上も経っていることから、一般的に歴史資料としての認識はありますが、昭和50年代以降のものは、資料としての認識が薄く、そのため、散逸や廃棄などにより、当時の街の風景や歴史をたどる写真資料の収集が難しくなっています。また平成10年代以降は、写真のデジタル化が進んだことから、紙焼きによる写真がほぼ収集できない現状もあり、昭和以降の街の発展や歴史を、写真を通じてたどることが難しくなっています。

令和の風景も、数十年後には歴史的な風景となります。「現在の福生を記録し、未来に伝えること」を意識し、今の風景が将来的に空白とならないよう、コンテストで集まった写真を、歴史資料として保存することとしました。



●江戸時代から続く酒造蔵

⑥ 全児童・生徒による撮影場所候補の選定

さて、撮影場所候補の選定についてです。候補については、校長会を通じて、各小中学校全学級に市内の風景1箇所の推薦をお願いいたしました。先生がたには、学級会を活用し、社会科見学に行った場所や学校近隣等、あらかじめ候補地を複数選定して示す等の工夫や、保護者と相談して候補地を決めてくる等、児童・生徒の実態に応じた助言を依頼しました。

その結果、全学級から推薦場所が提出されました。重複や学区のバランス等を検討したうえで、次の10箇所を撮影場所として選定しました。

- ①玉川上水緑地日光橋公園 ②福生公園 ③福生ベースサイドストリート ④多摩川 ⑤玉川上水 ⑥熊川神社
⑦福生神明社 ⑧福生駅西口・銀座通り ⑨市内小中学校 ⑩市役所・市民会館等の市内公共施設

結果を見ると、学校や公園、自然豊かな場所など、子どもたちが、普段過ごしている場所が多いと感じられます。推薦理由には、「自分たちが学び友達とともに過ごしたいちばん思い出に残る場所だから」「自然がいっぱいでとても広い所だったので、たくさん遊んだことを思い出したから」などとあり、子どもたちの気持ちが伝わってきます。候補を考えるうえで、学級会や家族との相談などは、学習活動としても大変有意義であったのではないかと考えております。



●玉川上水新堀橋付近

子どもたちがコンテストに関わるのは、場所の選定だけではありません。7年度に行う応募写真の審査についても参加を予定しております。この審査については全児童・生徒による投票を考えており、その方法として学習用端末機 iPad を利用予定です。

自分たちで選定し、自分たちで決定する。そしてその結果は、展示会や図録で発表され、将来に伝えられる。子どもたちにとっても大変楽しみなのではないでしょうか。

⑥ 未来の福生へつないでいく人材として

福生市では加藤育男市長が掲げる「こどもまんなか ふっさ」のローガンのもと、児童・生徒が参加する事業を推進しています。今回の写真コンテストを通じて、子どもたち自身が、住んでいる街、育っている街を、より大切に感じ、やがて福生を、地域を支える人材に育てほしい、と願うとともに、集まった写真が福生の近現代史をまとめるうえでの、貴重な歴史資料となるよう、後世に伝えていきたいと考えています。

現在も写真は募集中です。コンテストの応募資格に制限はございません。事業の趣旨をご理解いただき、多くのかたのご応募と、福生市へのご来訪をお待ちいたしております。



●国道沿いの商店街

きょういく 見聞録^①

『～令和の記憶・記録プロジェクト～ 「未来に残したい福生の風景写真コンテスト」』 －全てはふっさっ子の未来のために－

福生市は都心から西へ約40kmに位置し、人口約56,000人、南北約4km、東西約3km、面積は10.16km²のコンパクトな街です。福生市全域の約1/3を占める在日米軍横田基地があり、多国籍、多文化な街としても知られています。

この多文化な街・福生で、子どもたちの郷土愛醸成と、歴史的・文化的な福生市内の風景を未来に伝えることを目的に、市内公立学校に通う全児童・生徒が参加する『～令和の記憶・記録プロジェクト～「未来に残したい福生の風景写真コンテスト」』を企画しました。

福生市教育委員会 教育部 生涯学習推進課長 ^{ひしやま えいざぶろう} 菱山 栄三郎

① 全校がコミュニティ・スクール

福生市には小学校7校、中学校3校、全10校の公立学校があり、約3,300名の児童・生徒が通っています。平成28年度の福生第四小学校を皮切りに、令和2年度までに全10校がコミュニティ・スクールとなり、地域との連携を深め、地域とともにある学校づくりを推進してきました。地域のかたがたを中心に、各校10名、全100名のコミュニティ・スクール委員が学校運営に参画しています。

② 全児童・生徒にiPad貸与

「いつでも、どこでも、何度でも」。福生市の児童・生徒が貸与されている学習用端末機iPadを活用するための合い言葉です。この端末機はLTE機で、課題追究や家庭学習など、いつでもどこでも、調べ学習や通信を行うことができます。子どもたちは、まるでお気に入りの文房具を扱うように、身近に利用しています。

このような学習環境の中、子どもたちの学びを深めるとともに、郷土愛を育むことを目的に、令和6年7月から1年間の写真コンテストが始まりました。

③ 「未来に残したい福生の風景写真コンテスト」とは

『～令和の記憶・記録プロジェクト～「未来に残したい福生の風景写真コンテスト」』は、令和6年度、7年度の2か年で実施する、新しい事業です。6年度は福生市内の風景写真を募集、7年度は応募された写真の審査と、福生市郷土資料室での写真展の開催、写真図録と絵葉書の発行を予定しております。

募集する写真は、次の2部門です。

- (1) 小中学生が選ぶ未来に残したい福生の風景（場所指定部門）
- (2) 撮影者が思う未来に残したい福生の風景（自由部門）

応募期間は、令和6年8月1日～令和7年7月31日までの1年間で、令和元年以降の撮影写真も応募可です。応募期間が長いのは、四季折々の風景や、お祭り、各種イベントなど、市内の1年間のさまざまな風景を撮影対象とするためです。



● 写真コンテストポスター

④ 写真コンテストが目ざすもの

今回の写真コンテストは、福生市教育委員会生涯学習推進課文化財係が担当しています。学校教育のみならず、生涯学習の視点からも、コンテストには大きな狙いが2点あります。

1点は、市内の全児童・生徒に写真コンテストに関わってもらうことで、福生という郷土への愛着心を醸成することです。福生市には、横田基地周辺の洋の風景と、江戸時代から続く二つの酒造場等和の風景、玉川上水や多摩川等の緑豊かな自然の風景、寺社仏閣等歴史的な建物といった郷土の特色ある風景があります。そこで、市内の全児童・生徒に、自分たちが後世に残したい、将来に残したい、と考える福生市内の風景、例えば、小さい頃から友達みんなで遊んだ公園、思い出の場所、大切な場所などを、撮影場所の候補として、その理由とともに選定してもらいました。それが、応募写真の場所指定部門「小中学生が選ぶ未来に残したい福生の風景」です。

もう1点は、応募された令和初期の風景写真を、将来的な市史編さん事業などに活用する、郷土の歴史資料とするため

● プロジェクトを支える「甲州市ティーチャーズノート」の共有

平成 26 年度からは「甲州市ティーチャーズノート」を作成し、学習指導要領改訂や令和の日本型学校教育の実現に向けて、その都度見直し大きく改訂を行ってきた。このノートは甲州市の教職員がプロジェクトの取り組み内容を全員で共有し、学校が主体となって甲州市の子どもたちの教育活動にあたることのできるよう、必要となる内容を収録したものである。収録されている取組内容を各学校で活用することによって、全学校、学級において一定の教育水準の確保を図るとともに、児童生徒側にも自身が主体となる学びへとベクトルを向かわせてゆくねらいがある。

ティーチャーズノートの実践内容をより補強する形で、有識者を招聘しての研修も年 4 回行っている。昨年度・今年度は、早稲田大学教授・河村茂雄先生、東京学芸大学教授・高橋純先生、山梨大学准教授・三井一希先生、上越教育大学教授・赤坂真二先生、春日井市立高森台中学校・小川晋先生、春日井市立藤山台小学校・久川慶貴先生にご来訪いただき、学級経営と学級づくり、個別最適な学びと協働的な学びについての全教職員研修を行った。ノートの活用と研修は、ともに教員の資質・能力の向上にもつながっている。



● 全職員研修 河村茂雄先生

● リーディング DX スクール指定校の取組と市内各校の授業実践の共有

GIGA 端末の標準仕様に含まれている汎用的なソフトウェアとクラウド環境を十全に活用し、児童生徒の情報活用能力の育成を図りつつ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実や校務 DX を行い、全国に好事例を展開するための“リーディング DX スクール”。甲州市立塩山南小学校と塩山中学校はその指定校になっており、市内の小中学校へ、そして県内外への横展開を行ってきた。学校 DX 戦略アドバイザーの山梨大学准教授の三井一希先生には 2 年間にわたり、アドバイザーとして指導助言をいただき、授業の質や学びの質を高めている。

指定校になって 1 年めは子ども主体の授業のイメージがわからず、苦慮する場面もあったが、全国の先進校を視察し校内に還流することで徐々に授業のイメージや方法をもつことができるようになった。

甲州市の Chat スペースでは、各校がつながって情報の即時共有ができていたほか、情報の集積所として甲州市 ICT サイトを開設し、市内の先生がいつでも、どこでも好きなタイミングで有識者の資料や先進校の授業動画等を視聴可能にした。先進校の小学校低学年から中学校までの国語、社会、算数・数学、理科等の授業動画を 20 本程、市内の先生が共有できる環境設定を行っている。

2 年めを迎えた今年度は、先進校から学んだかきもあり、学校や子どもの実態に合わせた子ども主体の授業が展開できるようになった。また、学ぶ立場から市内に発信する立場となり、市内の先生がたが全クラスの授業を見られるようにプチ公開授業も行った。市内の先生がたが気軽に子ども主体の授業を学び、さらに自身の学校内に波及させ、どの学校でも子ども主体の授業が行われるという好循環を生みだしている。



● 甲州市 ICT サイト



● 個別最適な学び



● 学校 DX 戦略アドバイザー・三井一希先生の指導

東京

柔軟な発想で学校を変える

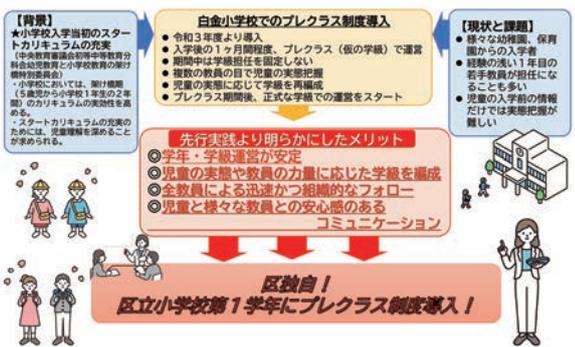
港区教育委員会 学校教育部長 吉野 達雄

港区は、世界一幸せな教育都市を目指しています。これまで、国際理解教育を推進するために、区独自に小学校では1年生から国際科を週2時間、中学校では外国語の授業に加えて英語科国際を週1時間設定するとともに、幼小中全てに外国人講師を配置し、英語でのコミュニケーションや自国や他国の歴史や文化を学んでいます。また、どの自治体よりも先駆けて一人1台のタブレット端末を配置し、現在は複線型授業を通した自由進度学習に取り組んでいるところです。他にも小学校1年生の各学級に補助教員を配置、中学校3年生におけるシンガポールへの海外修学旅行、全ての部活動へ部活動指導員の配置など先進的な施策を多く実施してきました。これらには多くの経費を投じる必要がありますが、予算を計上しなくても柔軟な発想による施策で、学校を変えることができます。例えば、小学校における教科担任制の実施、働き方改革としての3週間の閉校日とテレワークの実施などがあります。

港区では来年度から「小学校1年生におけるプレクラス制度」の導入を目指しています。プレクラス制度とは、入学後の1ヶ月間程度、仮の学級で運営する方法のことです。期間中は学級担任を固定せず、複数の教員の目で児童の実態把握に努め、プレクラス期間経過後、児童の実態に応じて学級を再編制し、正式な学級での運営をスタートします。第1学年担当の全教員・講師がプレクラス期間中に、全児童に関わることで、期間後の運営において、組織的なフォローを迅速に行うことができます。また児童にとって、学級担任以外の教員も顔なじみになり、いろんな教員に相談でき、安心して学校生活を送る環境づくりにもつながります。

ここまでの施策に興味のあるかたはぜひ連絡をください。一緒に教育施策について語り合いませんか。

区立小学校第1学年でのプレクラス制度導入について



全国各地のさまざまな取組を紹介します。

岩手

ふるさとに愛着を抱き、人間性豊かな人材の育成

田野畑村教育委員会 教育長 藤岡 宏章

田野畑村では、「未来へ吹く風を共につくる～人と自然が織りなす心豊かな協働の村～」の考えのもと、幼小中連携により「子どもは地域の宝」として「スケールメリット」「エリアメリット」の特性を活かし、地域との連携・協働の中で社会性を育む教育を進めています。

その中核が、小中9年間を貫く田野畑の「魅力と強み」を最大限に活かした学び「田野畑学」です。今年度から特に意識していることは、イノベーションとアントレプレナーの視点からの田野畑学の展開による豊かな人格の形成という点です。今年度は、本村と60年にわたる交流の歴史をもつ早稲田大学の学生による関わりを強め、中学生が取り組む「仮会社 Comaru」（日本最大の一揆である三閉伊一揆で用いられた「小〇」が由来）という活動において、大学の授業とのコラボレーションによる企画運営提案の形で学生に参画してもらい、身近な憧れの存在として教育活動に大きく貢献してもらっています。

このことは、中学生の学びに広がりや深まりをもたせるとともに、教職員の創造的な面の向上等、取組のクオリティ向上にもつながり、また学生にとってもこれからの地方創生のあり方の研究のフィールドワークの機会になっています。地域のみならず関係機関も巻き込み、学びを豊かなものにしていくさまざまな工夫を考え進めています。

同じような大学との連携には、アメリカのアーラム大学とも50年以上の交流があり、毎年「国際交流キャンプ」を実施するなど国際理解教育と英語教育の充実にも取り組んでいます。

三陸海岸、ジオパーク、英国タイムス紙で紹介されたみちのく潮風トレイル等、学習素材としての大きな魅力を有する「地の利」と、小規模だからこそそのネットワークの軽さと身近な関係性を活かし、人と人とのつながりを重視した教育の展開を通して、児童生徒と大人がともに学び豊かに生活するウェルビーイングの創出を目指していきたいと考えています。

田野畑学のポイント

- 田野畑の人・もの・ことを教材材料として行う学習
 - 小・中9年間の見通しをもった系統的・発展的な学習
 - 田野畑のよさを実感し、愛着と誇りをもてる学習
 - 愛着と誇りが自尊感情を高め、自立した人を育む学習
- +
- Society 5.0 対応、21世紀型能力（基礎力・思考力・実践力）を身につけ、認知能力と非認知的能力の調和を図ること

福岡

「チーム担任制」と「結-EN」の導入

飯塚市立飯塚第二中学校 校長 古野 守和

生徒指導上の課題や不登校生徒の増加、特別な支援を必要とする特性をもった生徒の増加など、多様化かつ複雑化した学校の課題の解決が急務となっています。これらの課題を解決することで誰にとっても安全安心な学校とするためには、教職員の協働体制を強化することが重要と考え、本年度から1・2学年においてチーム担任制を、3学年において複数担任制を導入しました。

チーム担任制には、先進校の事例から「異なる多くの視点で生徒を見守ることができる」「生徒指導上の問題について、適材適所で指導体制を組むことができる」「生徒にとって相談しやすい先生を選ぶことができる」などのメリットが報告されています。

1学期末に行った生徒アンケートでは、「多くの先生とたくさんのお話ができるようになった」「相談できる先生を選べる」など肯定的な回答が多かったのですが、「先生によってやり方が違って戸惑う」などの意見もみられました。

複数の担任による協働体制で学級を運営していくためには、生徒理解を深めるためのシステムが必要であると考え、「Yui Connection」が開発した小中学校学級支援システム「結-EN」も併せて導入しました。このシステムは課題を抱える生徒に接する教員が生徒の特性を知るための質問紙に回答することで、生徒の行動傾向が明らかになるとともに、課題解決のための教育プランが提案されます。このことで、生徒指導に関する会議の焦点が生徒の情報交換から具体的な指導方針の明確化にシフトすることができました。

複数の教員が担任を担当するチーム担任制において、特性をもった生徒の指導方針の共有化が図られるため効果が高いと感じます。今後は、チーム担任制と「結-EN」の運用の工夫によって、生徒の抱える課題の解決に迫るとともに、業務の軽減を図っていきたくと考えています。



静岡

部活動改革チャレンジ中「しず部」

#各地のチャレンジャーとつながりたい

一般社団法人 しずおか BukatsuDO クラス 代表理事 寺尾 光正

静岡市では学校部活動にかかわる新しい地域クラブ「シズカツ」を構築し部活動改革を始めています。これに呼応し、元校長らが「しず部」を2022年8月に設立、2023年度より本格活動を開始しました。歌うた部やギター部など文化系部活動を中心に、大道芸部やプラモデル部など、これまでにない部活動により生徒の選択肢を増やし、部活動を充実させています。みんなが笑顔になり、幸せを感じる活動の輪が広がっています。

●「しず部」の目標

自分らしく(主体性)、夢にチャレンジし(可能性)、出会いに感謝する(社会性)

●「しず部」の特色

- ①理事・顧問として、元校長5名が中心となり設立した法人が運営。理事は各部のマネージャーとしても顧問に伴走
- ②顧問が大自慢。その道のプロ・教育者が専属顧問
- ③初心者や他の部活(学校部活動)との二刀流(掛けもち)を大歓迎
- ④保護者会や部費管理等の保護者負担なし
- ⑤学校や関連機関と連携が広がり、活動がより充実。後援：静岡市PTA連絡協議会 協力：静岡市(プラモデル振興係)、静岡大学関係研究室、包括連携：NPO法人しずおか音楽文化支援協議会 他
- ⑥中学生を中心に、希望により、小学生から高校生まで参加



HP



Instagram

●現在の活動

- ・月3回程度、土日に3時間以内/1回(平日は部により動画等で自主活動)
- ・会場 静岡市内中学校
- ・イベント等への参加 静岡まつり、みなと祭り、高齢者施設訪問、大道芸フェスティバル、静岡市PTAフェスティバル、町内会夏祭り、他 地域オファー多数

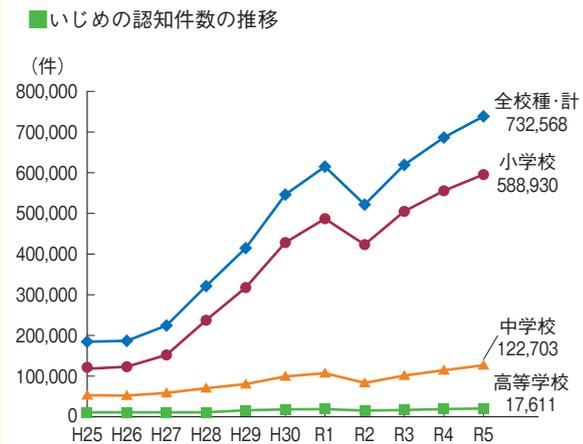
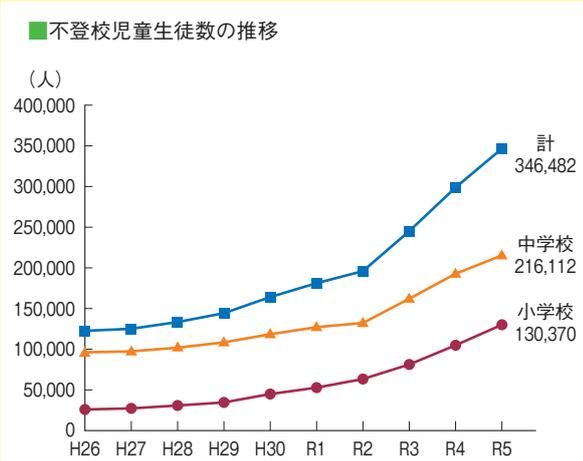


子どもの心理とコロナ禍

～コロナ禍とその後が起こったこと・起こっていること～



東京学芸大学教授 松尾 直博



「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」(文部科学省)より抜粋

不登校児童生徒の増加
小中学生の不登校の推移をみると、平成26年度より増加に転じ、コロナ禍2年めの令和3年度から増加率が急になってきている。コロナ禍は不登校の急増のきっかけに過ぎず、その前から学校に通い、集団で生活し、学ぶということの意

義が問われる状況は始まっていたと思われる。高等学校は、ずっと横ばい、微減という推移だったのが、令和3年度から増加が続いている。
いじめ・犯罪・自殺の推移
いじめについては、認知件数は一貫して増加傾向にあるが、皮肉なことにコロナ禍1年めの令和2年だけ減少していた。休校、時差登校、部分登校があり、ソーシャルディスタンスを強調する学校においては、児童生徒間のよい人間関係の形成も難しかったが、いじめも起こりにくかったと考えられる。
また、少年犯罪(刑法犯の検挙人員)は平成16年以降減少し、平成24年以降は戦後最少を記録し続けていた。しかし、令和4年から増加に転じ、令和5年は2万6206人(前年比25.3%増)であった(令和6年版 犯罪白書)。戦後全体でみるとまだ低い水準ではあるが、2年連続の増加は気になるところである。
小中高生の自殺者数は平成23年以降、毎年

不登校児童生徒の増加

子どもの発達や精神的健康の状況悪化に関して、「コロナ(禍)によって」という言葉で原因や要因が語られることを多く耳にする。確かに、新型コロナウイルス感染症拡大が子どもの環境に悪影響を与えた部分があることは否めない。しかし、実際にはコロナ禍の前から生じていた歪みや、微妙なバランスで何とか保っていた子どもの心身を育む構造が変わった結果、さまざまな課題が生じ、今もなお増幅しているといえる部分もあるのではないかと。なんでも「コロナ(禍)によって」だけで片づけていたのでは、同時多発的に起きている課題の本質を見誤ることになる。

コロナ禍と課題増加のタイミング

まとめると、以前から増加傾向にあり、コロナ禍に急増したものの(小中学生の不登校、小中高生の自殺、コロナ禍に増加に転じたもの(高校生の不登校)、コロナ禍後半(令和4年以降)に増加に転じたもの(少年犯罪)、コロナ禍にいったん減少した後増加したもの(いじめ認知件数)などがある。コロナ禍前より、子どもを取り巻く状況の変化は少しずつ、あるいは急激に起こっており、それによって「人」と「人」「人」と「モノ」とのつながりや連なりが変わってきた。そうした変化がコロナ禍によって増幅・変化し、子どもや大人に影響を与えているように感じる。次号ではこのような状況と課題との関係について考察してみたいと思う。

松尾直博 (Naohiro Mastuo)
筑波大学大学院博士課程心理学研究科修了。自治体の発達相談心理判定員や母子保健センターの心理判定員、スクールカウンセラーなどを務める。公認心理師、臨床心理士、学校心理士、特別支援教育士スーパーバイザー。『新時代のスクールカウンセラー入門』(時事通信社)など、著書多数。

【連載第2回】（全3回）

郷土資料館が、市民の「居場所」に ベーゴマが結ぶ人の輪



埼玉県川口市教育委員会
教育総務部 文化財課

井出 祐史

今年度で開館43周年になる川口市立文化財センター「郷土資料館」に今、地元の小学生を中心に多くの来館者が集まっている。お目当ては、ベーゴマ。川口の伝統産業である鋳物づくりの歴史を紹介する常設展示室の一角に設けたベーゴマコーナーには毎日、放課後になると小・中学生が集まってくる。土日には、その人数は100人を超える。

①資料館にベーゴマを

展示するようになったわけ

実はベーゴマを製造する会社は現在、国内でわずか3社。その中で、川口の会社であり、唯一のベーゴマ専門メーカーとして知られる（株）日三鋳造所にっさんちゆうぞうしよでつくられるベーゴマは、昔から全国のベーゴマファンから愛されている。このベーゴマを用いて毎年開催されている「全国ベーゴマ選手権大会」には、九州や中国地方、関西からも出場者が集まることから、川口は「ベーゴマの聖地」と呼ばれている。

この日三鋳造所には以前、「ベーゴマ資料館」と名づけた私設の展示室が設けられていた。大正時代のベーゴマをはじめ、貴重な資料を多数展示していたが、令和4年3月で事務所移転に伴い閉館の危機に瀕することとなった。そこで郷土資料館に資料を寄贈していただき、同年6月からベーゴマの展示とベーゴマで遊べる体験コーナーを設けた。



●資料館のベーゴマコーナー

②「ベーゴマ教室」を開始、増える来館者数

ベーゴマの展示と体験コーナーを設けたことに加えて、新たな学校連携事業として「ベーゴ

マ教室」を始めた。日三鋳造所のベーゴマ名人・中島茂なかしましげ氏の協力を受け、各学級1時間ずつ、45分間で必ず全員がベーゴマを回せるようになる体験教室は大ヒット。令和4年度から今年度まで



●ベーゴマ教室の様子

の3年間で、のべ100校以上、1万人以上の小学生がベーゴマを回せるようになった。そして、学校で教わった子どもたちが家族を連れて、あるいは友だちと待ち合わせて次々と郷土資料館へ集まるようになった。郷土資料館における月あたりの来館者数は年々増加し、今年度にはコロナ禍以前の平均の65倍、という月もあるほどに成長している。

③郷土資料館が市民の「居場所」に

「知らない人ともベーゴマで遊ぶと仲よくなる」「年齢も性別も関係ない。子どもが大人に勝つこともあるのがおもしろい」「ベーゴマ勝負の合間に、ほかの展示を見てみたら、川口ってこんな歴史があったんだ、と驚いた」という来館者の声が多く聞かれる。ここに来ると、だれもが童心に返り、時間を忘れて夢中になってしまう。住んでいる地域も、年齢も、性別も違う、名前も知らない者どうしが声をかけあって遊び、それがいつしか顔見知りになり、自然と友だちになっている。今、郷土資料館がたくさんの市民にとって、何度でも足を運びたい場所、大切な「居場所」の一つになっている。



●ベーゴマをきっかけにつながる人の輪

『13歳からのアート思考』が提示する ほ・つ・と・な・出・会・い 新しいものの見方・考え方

アート教育実践家・アーティスト 末永 幸歩さん



子どもたちの態度や作品に大きな変化があったそうです。
知識・技能の習得を切り捨てるわけではないのです。まずは基礎の部分で、自分なりのものの見方を探究する。そうすると

全国の学校で実践されている思考法とは？

2020年に上梓した『自分だけの答え』が見つかる13歳からのアート思考』では、私が中学校の学校現場で実際に行ってきた美術の授業をもとに、本の中で授業を展開しながら、既存のものの方にとらわれないアート思考の方法を提示しています。

この本を授業で活用し実践した全国の先生がたからは、「全ての教科に通じる考え方」という声が寄せられ、幅広い教科で受け入れていただいています。

例えばある先生は、小学校で絵を描く授業のとき、自由に描いていいですよと言っても、子どもたちは「うまく描けないからいやだ」とか、「できない、先生描いて」とすぐ投げ出してしまつことに難しさを感じていたそうです。そこで、拙著に掲載されているアンリ・マティスの『緑のすじのあるマティス夫人の肖像』を例に、「素晴らしい作品とは一体どういうものだろう」との問いを投げかけてみたそうです。その絵は、人物の肖像が荒い筆致と非現実的な色彩で描かれています。技術的に上手に描けた絵とか、本物そっくりに描けた絵だけが優れている作品ではない。自分なりに「本当に素晴らしい作品とは何か」を考えさせ、表現するよう仕向けたところ、

新しい視点を得たきっかけ

道具はどう使われてきたのかなとか、この作者は他にどんな作品を描いたのかなとか、疑問がわいてきて、知りたいという欲求が出てきます。そのとき初めて、知識や技能を応用として学んだほうが、よっぽど吸収も早いと思います。学校は正解を教えるだけでなく、子どもが自分自身で答えを作っていく場でもあるべきだと考えます。私が彼らに知識・技能を授けるのではなく、子どもが自分自身で学ぶことが大事。子どもの探究心を呼び覚ます触媒、きっかけになりたいなと思っています。そのために、子どもが今もっている考えにあえて風穴を開けてみる。「全然違うものの見方もあるかもよ」と可能性を提示することに徹しています。

私自身を振り返ってみると、都内の中学校教諭として美術を教えていた当時は、今のような考え方はあまりしていなかったように思います。明日の授業は何をしようとか、生徒との日々の関わりや行事に追われ、ゆっくり芸術教育について考えを巡らせる時間がありませんでした。大きな転機となったのは、いったん教職を離れて大学院で学び直したときです。大学院で知り合った仲間たちと課外活動的に造形ワークショップを始めました。地域の子どもたちを招いてワークショップを行う中で、自分は学校教育の一つのやり方にとらわれていたと実感したのです。例えば制作物が完成しない子ども。学校では「学期内に全員の作品を完成させなければ」と思っていました。ワークショップでは必ずしも完成させる必要はありません。制作物を目的とするのではなく、制作の過程を通して何をめざすのかということに立ち返る機会となりました。

大学院在学中も教員は非常勤で続けていたのですが、ワークショップの場で得た気づきや培った視点を、中学校の教育現場でも実践していきま

した。そうした流れの中で、芸術教育に関する私のものの見方は変わっていったように思います。そこでの経験が『13歳からのアート思考』の礎にもなっています。

大人こそ自由なものの見方・考え方を

アート思考を養うために必要なことは、ぜひ美術館に足を運んで、実際に作品を鑑賞していただきたいですね。ただ、そこにある作品を全部見なきゃと思うと、情報収集ばかりになって大変です。ただ知識を得るというのではなく、自分の答えを作るといふ鑑賞がなされてもよいのではないのでしょうか。

私が美術館へ行くときは、たった一つ作品を時間をかけて鑑賞することを心がけています。その作品を見て何を感じたか、立ち止まって自分の心に向けてみてください。それが自分なりのものの見方で見て、自分の答えを作り、新たな問いを生み出すという、アート思考を養うきっかけになるのではないかと考えています。



末永幸歩 (すえなが ゆきほ)

武蔵野美術大学造形学部卒業。東京学芸大学大学院教育学研究科(美術教育)修了。東京都の中学校の美術教諭を経て、2020年にアート教育実践家として独立。各地の教育機関や企業などで講演やワークショップを通して、学ぶことや生きることの基盤となるアートの考え方を伝えている。著書に、22万部超のベストセラー『自分だけの答え』が見つかる13歳からのアート思考(ダイマインド社)がある。東京学芸大学個人研究員。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆自然写真家・松本紀生さんの記事、「結果よりなにより、己が全力を尽くしたかどうかが重要」。松本さんのこのような仕事に対する姿勢、生きる姿勢、そしてなにより、そういう中で撮影した写真がフォトライブのイベントに参加した小学生の心を揺り動かし、感動を与え「松本さんがかわいそうだ」と泣くことにつながったのだと思います。すごい影響力、教育力です。
- ◆教育見聞録①。教師一人一人を活かす宮國義人先生の学校経営はすばらしい。教師も子どもも大切にしていますね。
- ◆愛知県岩倉市立南部中学校の中村夏帆先生の取組と、アルパ・エデュ代表理事の竹内明日香さんの記事を読ませていただき、共通して「ことば」を大切にされた実践の重要性を改めて認識させていただきました。

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。学びのチカラで「自ら問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつなげていく。そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版